

令和元年度第1回小学校ゼミナール議事録

2019年度5月31日(金)

於：広島大学

司会者・発表者：長江優衣(広島大学教育学研究科院生)、八島恵美・結城和夏・中林玲奈
(広島大学附属小学校教諭)

参加者：影山和也(広島大学准教授)、八島恵美(広島大学附属小学校教諭)他10名

1. 協議の概要

本年度の小学校ゼミナールでは、「統合的に考える力を育成する算数科カリキュラムの開発」というテーマを「統合」、「数学的モデル化」、「SDGs」の3つの視点で検討する運びとなった。第1回小学校ゼミナールでは、この研究テーマの妥当性や「統合」、「SDGs」について発表及び議論が行われた。

2. 協議の実際と質疑の要約

はじめに、附属小の先生方から今年度の研究テーマについて「統合」・「SDGs」に注目した経緯について説明がなされた。

数学的モデル化の際にSDGsとの関連を踏まえて社会問題に関する数値を扱うことが提案された。しかしこれに対して、現実の問題を算数の教材として授業で扱っても現実から切り離されるため生徒にとっては実感が湧かないという意見が出された。そのため、算数の場合は現実を扱うよりも、理想化された虚構の世界で算数的な見方・考え方を育み、その見方・考え方を現実に利用していくという方向性が共有された。

次に、院生から「SDGs」と「統合」について説明がなされた。その際にSDGsにおける「統合」の意味と、算数・数学科における「統合」の意味は異なるのではないかという意見が挙げられた。具体的には、前者は社会・経済・環境の三方面からそれぞれの特性を生かしながら協働的に問題解決に取り組むことであり、後者はばらばらであった概念等を一つにしていくことではないかというものである。また別の意見として、中央教育審議会答申において「論理的、統合的・発展的に考えること」と示されているので、「発展」もテーマに加えた方が良いという意見も挙げられた。SDG4の「質の高い教育をみんなに」に掲げられた10個のターゲット中で算数と関係が深いものとして「ニューメラシー(numeracy)」が挙げられる。社会や文脈によって求められるニューメラシーは変化するので、文脈に即した数の扱い方を知るといった活動を算数科において行うことが考えられる。

研究テーマの再考、算数科とSDGsとの関連性の模索を次回への課題とした。

(文責：吉岡国晃)